

鎌倉時代に日本に教えが伝えられて以降、約800年にわたり独自の深化を遂げてきた禅宗の臨済宗と曹洞宗が、2月に初の合同シンポジウムを開く。双方で行われている法要「開山忌」の紹介を通じ、多くの人に禅の世界に触れてもらう考えだ。

臨済・曹洞初合同シンポ

800年間 独自深化遂げてきた2宗派



①臨済宗妙心寺派大本山の妙心寺にある仏殿(京都市右京区)と②曹洞宗大本山の一つ、永平寺の境内にある仏殿(福井県永平寺町)

来月13日、「開山忌」テーマ 禅の教え紹介

禅の教えは達磨がインドから中国に伝えたとされる。達磨から数えて6代目にあたる唐代の僧・慧能以降、次第に臨済宗や曹洞宗などに分かれた。日本では中国に学んだ栄西が鎌倉時代初頭に建仁寺(東山区)を開き、国内での臨済宗の先駆けとなった。後に日本の曹洞宗の祖となる道元も建仁寺にいたが、中国から帰国後に離れた。現在では一般的に臨済宗は公案と呼ばれる禅問答を重視する一方、曹洞宗は座禅を重視するとされる。

シンポジウムは臨済宗で最も末寺の多い妙心寺派と曹洞宗が開く。両宗派は2016年から宗派の幹部が相互に訪問したり、研究者同士が親交を深めたりしており、交流事業の一環として開山忌法要をテーマにシンポジウム開催を決めた。

開山忌は寺を開いた高僧をしのび、その恩に感謝する法要。開山忌を重視するのは日本の禅宗の特徴といい、妙心寺派大本山の妙心寺(右京区)、曹洞宗大本山の永平寺(福井県永平寺町)や総持寺(横浜市)でも名称は異なるものの毎年行われている。

シンポジウムでは妙心寺の法要運営の実務トップ、永平寺名工屋別院(名古屋市中)の責任者などが、両宗派での開山忌の作法、特徴などについて写真を交えて紹介する。さらに登壇者同士の討論もある。

花園国際禅学研究所研究員で、企画に携わった曹洞宗僧侶の館隆志さん(42)は「普段見られない写真も多いはず。二つの宗派の同じ点や違いなどを発見してもらいたい」と話す。シンポジウムは2月13日午後1時から花園大教室で、定員120人。同研究所075(8223)05885に申し込む。無料。

(浅井佳穂)